



小説の未来 (19)

憎しみの考察

春日信彦

文化を創造する言語・記号

小説とはいかなるものか？今まで述べてきたように、小説は言語・記号によって構築された娯楽作品と言える。当然それでいいのであるが、それ以外に何か大きな役割はあるのだろうか？あくまでも私個人の考えに過ぎないが、小説は、人間の脳細胞（ニューロンとグリア細胞）とそれによって生産される言語・記号を考察する一つの方法ではないかと考えている。

細胞分裂の過程によって生み出されたであろう人間は、生殖行為によって繁殖増加し、単純な音声言語を媒介とした家族からなる村といわれる小集団を形成し、さらに、近代に至っては、複雑な言語・記号や貨幣を媒介とする企業や国家のような大集団を形成するようになった。

人間集団の最大の特徴は、言語・記号を媒介としていることです。世界経済を支えているドル、円、ユーロ、などの貨幣も言語・記号の一形態なのです。言い換えれば、物質と運動に価値を与え、その価値をだれもが認識できるように十進数を使った数値として表し、その数値を具体化したものが、貨幣なのです。

さらに、人間は、自然界の物質を利用するようになりました。身近な石や木だけでなく、地下の鉱石、地上の水、大気的气体、さらには、目に見えない原子や電子までも利用するようになりました。当然、これらを利用するために、言語・記号が大きな役割を果たしているのです。

歴史的に創造されてきた多種多様な言語・記号によって、高度な文化が創造され、我々人間は、文化的な生活を享受してきたと言える。人間以外の生物は、人間のような文化の創造はできない。なぜか？それは、彼らには、言語・記号を生産する細胞を持ちえていないからです。

今、言語・記号が文化の創造を可能とする道具の一つと仮定したならば、言語・記号を創造するAIは、人間と同じような文化の創造が可能ということになる。いや、人間以上の文化の創造が可能と言えるかもしれない。

言語・記号は関数として機能する

言語・記号というものはどうやって生み出されるか考えてみましょう。まず、五感からの刺激を受けた言語脳細胞が一定の運動を行います。次に、その運動は言語・記号概念を作り出します。そして、さらに、視聴触覚で認識することができる物体を生産します。この生産された物体が言語・記号（文字、音声、点字）なのです。

例えば、視覚によって認識される黒色、赤色、青色などの文字、聴覚によって認識されるものの音声、触覚によって認識される点字など。

そこで、特に重要なことがあります。言語・記号は、脳細胞の運動が生み出した産物であって、現実の物質や運動そのものではないということです。身近な例でいえば、太陽という言葉は、あくまでも宇宙に浮かぶ目に見える太陽とリンクした”言語”であって、宇宙に存在する太陽”そのもの”ではないということです。

このようなことは、言われなくともわかっているといわれる方が多いでしょうが、現実には、意外と誤解しやすいのです。例えば、国家という言葉は、あくまでも一つの言語でしかありません。でも、国家という文字を目にすると、観念的には存在しますが、気持ちの上では、あたかも、国家という普遍的な物体が実在しているように感じるのではないのでしょうか。

また、観念的な国家という言葉の受け取り方は、人それぞれ千差万別と言っていいのではないのでしょうか。そう考えると、ある言語・記号は、各人の脳細胞に多大な作用を引き起こすが、その作用の結果は、複雑に異なるといえるのです。

脳細胞機能を数学的に表現すると、ある言語・記号と対応する概念は、無限に存在するといえるのです。だから、すべての人が、ある言語・記号をまったく同じ概念として、共有できるわけではないのです。また、日本語を理解できない外国人にとっては、日本語は、言語・記号として機能しなくなるということにもなるのです。

憎しみの考察

すでに、人間は生まれながらに恐怖心が内在していると述べましたが、この恐怖心は、いろんな憎しみを生み出しています。また、人間関係を考えるうえで、憎しみの考察は不可欠です。そこで、考察する方法として視聴覚的手法や言語的手法が考えられますが、私としては、最も適した道具は、言語的手法ではないかと思います。憎しみという感情的な観念も、具体的に理解するには、言語を利用する必要があると思います。

家族であっても、夫婦の憎しみ、親子の憎しみは、大なり小なり、存在します。人は、常に憎しみを抱きながら生きているといっても過言ではありません。生活していくうえで、必ずと言っていいほど生み出される憎しみは、人間関係を考察するうえで重要なテーマであるがゆえに、多くの小説家は、憎しみについて考察しています。

ほとんどの人は、いじめを受けた場合、いじめを受けたことによる心の傷の痛みを、自分自身で消し去ることは不可能に近いでしょう。だから、自分をいじめた対象に憎しみを持つのです。言い換えれば、憎しみを持つことによって、心の傷の痛みをいやしているといえるのです。

いじめられたことによる心の傷の痛みは、おそらく、死ぬまで続くのではないのでしょうか。それならば、いかにしてその痛みをいやし、憎しみを消し去ればいいのでしょうか。いじめた相手を殺害すれば憎しみは消え去るのでしょうか？自分がいじめられたように、自分より弱いものをいじめれば、気分がすっきりするのでしょうか？

憎しみというものは、いかなる方法によっても、癒されないと思っています。ならば、どうすべきなのでしょう。死ぬまで、憎しみを抱き続け、苦しみ続けて、死ぬ以外ないのでしょうか。痛みを感じないように、憎しみを抱かないように、神の信仰に頼る以外にないのでしょうか。

一生心から消え去ることのできない憎しみは、自覚されなくとも、必ず心を苦しめ、性格形成に大きな影響を与え続けていきます。そして、言葉に表さなくとも、表情、行動、肉体に必ず現れてきます。親にいじめられて育った人は、自分が親になった場合、その人は、無意識に自分の子供をいじめる場合が多々あるのです。

ところで、なぜ、私は、小説を書き始めたのか。今振り返って思えば、憎しみを考察したかったからではないかと思うのです。憎しみといえば、身近な人に対するものと思われませんが、学校や国家のような組織に対するものもあります。

高校生のところから小説を書き始めたのですが、心にはびこった負け惜しみや欺瞞（ぎまん）を見つめながら、小説を書いているうちに、自分に内在するいろんな憎しみを自分なりに自覚できたように感じます。まずは、父親に対する憎しみ、貧困を生み出す社会への憎しみ、戦争を引き起こす国家への憎しみ、など。

憎しみというものは、意外と自覚しにくい感情ではないでしょうか。いつの間にか、心の底に沈殿してしまうような感情のように思えます。この沈殿している憎しみという感情は、要注意なのです。

沈殿している憎しみは、日頃は浮き上がってきません。でも、心の底に沈殿した憎しみは、何かのきっかけで、突然、急激に浮上してくる場合もあります。そして、自分の性格に悩み始めた時、心の底に沈殿していた憎しみに気づくことがあるのです。

小説を書き続けているうちに、私は心の底に沈殿していた憎しみを具体的に感じ取れるようになりました。そして、自分の性格形成の過程までもある程度理解できるようになり、さらに、内在する恐怖も自覚できるようになりました。

自分の恐怖を自覚することは、自分の感情と思考を理解する上で、大いに役に立ちます。そして、存在の原則というようなものをなんとなくわかるようになりました。

小説は現実の鏡

小説を書くということは、私をどこに導いてくれたのか。何を教えてくれたのか？それは、内在する恐怖の自覚と存在の原則の理解であったように思えます。物理学的には、”いかなる物質も運動もバランスをとるように存在する”

数学的には、”無限集合は有限集合からなり、有限集合は無限集合からなる”という概念です。

当然、小説を書くということは、脳細胞の運動の一つです。だから、脳細胞の運動について考察することにもつながります。そう考えると、小説を書くということは、科学的行為のようにも思えます。

物質と運動を解明するのは、科学論文ですが、架空の世界を設定する小説でも、物質と運動の理解へのアプローチができるようにも思えてきます。私の小説がどこに向かっていくかは、未知なるものですが、架空の世界が、実は、現実だったというような驚きをもたらしてくれるような予感もします。

私は、無意識に、子供のころから架空の世界を楽しんできましたが、若い人たちには、もっと、架空の世界を楽しんでもらいたいと思います。架空の世界を作り上げることが、現実の世界をより良いものにしていくためのヒントになってくれるような気がしてなりません。

地球上に存在するものには、物質と運動があります。いまだ未知なる人間という物質の考察も厄介なのですが、最も考察が厄介なのが、非生物的人間集団ではないかと思っています。その中でも、歴史的に多くの学者や作家を悩ませ続けている”国家”ではないでしょうか。

生物的人間個人と非生物的人間集団の関係を考察すること、また、物質と運動の考察をすることは、人間の責務のように思えます。そう考えると、なんだか気が重くなりますが、人間が存在する限り、誰かが、どこかで、研究し続けるのではないかと思います。

小説は無限関数

作者は、言語・記号を使って、自分の考えを構築するのですが、でも、必ずしも作者の意図が読者に伝わるとは限りません。というのは、小説の言語・記号というものは、読者の脳細胞に”作用するにすぎない”からです。

小説の言語・記号によって作用を受けた読者の脳細胞は、独自の運動を無限に行います。また、その無限運動は、各人違ってくるのです。このことから、小説は、無限関数と言えるのです。

小説では、言語・記号が使われ、多種多様な人間関係が描かれ、家族や社会について考察しています。小説を手にとった読者の言語・記号関数中枢は、小説に書かれている言語・記号から、視覚的作用を受けて、自分なりの言語・記号無限運動を行い、作者の言語・記号関数概念に近づいているのです。

小説は、言語・記号によって構築されているわけです。言い換えれば、小説そのものは、単なる言語・記号の集合体です。だから、読む人によっては、全く意味をなさないものでもあるわけです。

例えば、フランス語の分からない私が、フランス語で書かれた小説を読んでも、全くちんぷんかんぷんで、私にとっては、何の価値もない単なる文字のられつでしかありません。

仮に、ある言語で書かれた小説があったとします。この作品が意味を成すには、読者が書かれた言語を理解できるということが、前提となるのです。つまり、小説というものは、使われた言語・記号が、読者に対し関数的機能を果たした時に初めて、価値を持つのです。

小説にチャレンジ

小説は、論文ではありません。だからこそ、自由に、自分勝手に、未来を創造し、自分なりの現実感を創造できると思っています。今、自己嫌悪に陥り、社会に疑問を持ち、未来に悲観的な人達は、是非、自分なりの未来を創造するために、小説にチャレンジしていただきたいと思えます。

小説に無関心な人も、できれば、騙されたと思って、暇つぶしと思って、気分転換と思って、一度小説を書いてみられてはいかががでしょうか。小説を書いたからと言って、悲しみ、苦しみ、憎しみ、などが消え去るわけではないかもしれませんが、でも、きっと、現実を見る目が変わると思っています。

すでに述べたように、小説は、小学生でも書けるのです。芸術の中でも、小説は、もっとも原始的な創作活動なのです。私も、もうしばらくは、書けるように思っています。これから、小説は、私をどこに導いてくれるのか？私に何を教えてくれるか？楽しみにしています。未来を切り開く小説を武器に、ともに頑張ってみましょう。